HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	密教神話の成立と展開 ― 真福寺蔵「法釼図聞書」をめぐって ―
著者	鈴木，英之; SUZUKI，Hideyuki
引用	北海学園大学人文論集(74)：186(一)-174(十三)
発行日	2023-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

密教神話の成立と展開

――真福寺蔵『法釼図聞書』をめぐって――

鈴木英之

福寺所蔵の『釼図』は、南北朝期の最初期の三種神宝図として注目されている。

密教図像は論拠となる儀軌に従い基本的な図案が定められている。それゆえ図像と儀軌との関連は深く、本来

図1、神道本尊（三種神宝図）仁和寺本をもとに筆者作図

一、はじめに

日本中世において、天皇の権威の象徴である三種の神器（剣・内侍所・神璽）は、本地垂迹説を背景とした密教的な解釈のもとに図像化された。いわゆる「三種神宝図」である（図1参照）。

特異な形状の「法剣（宝剣）」と「梵筐」（内侍所）、「鬼面独古」（神璽）から成る「三種神宝図」は、中世の両部神道書『麗気記』に収載される神道図像（「神体図」）のひとつだったが、本図は、神道灌頂という密教儀礼で本尊として用いられたことから、中世から近世にかけて幅広く流布した[1]。全国に作例が多数のこされているが、真

的には他の言説が加わることはない。「法釵図」が本軌とする『麗気記』には次のように説かれている。

一柄三霊天叢雲剣者、従二第六天大自在天王一受二持之一、三戟利剣。立剣三峯六蛇三握剣也。中有二六龍神一。出二生七種玉一、破二六道邪見一、垂二一子慈悲一。握有二二輪一。大自在天両眼也。九葉蓮華得自性清浄法性如来、九界迷情形表也。自二地大之空一出二六蛇一、含二互尾一成二六輪一。留二六道一凡夫生死緤也。現二六波羅蜜一。六輪光明則法身表徳也。天瓊杵玉者、爰曰二独股一。大日本国心御量柱也。重如月横立者、薩羅沙・縛曰羅、文武二道、定慧横竪妙体、国中安寂吉瑞也。此三種神宝者、上三柱尊三昧耶妙体也。[2]

ここで挙げられる三種神宝のうち「一柄三霊天叢雲剣」が法釵に該当する。法釵は第六天自在天王から受けたもので、三つ叉の戟をもつ利剣とされる。刀身には六龍神や大自在天の両眼である二輪、さらに供養蓮花が描かれる。束には尾に噛みついた蛇でできた六輪があるという。

（二）

真福寺には、南北朝期の『麗気記』の写本や、三種神宝図（図1と同様）、神道灌頂儀礼にまつわる資料が所蔵される。三種神宝図は『麗気記』の成立と密接な関係があることが指摘されるが、その通り真福寺では、『麗気記』と、それを取り巻く図像や文物が重要視されていた。

また真福寺には、この『釵図』のほかに、その注釈書である『宝釵図注』『法釵図聞書』が所蔵される[3]（ともに南北朝期の成立と推測）。両書は、三種神宝図のうち主に「法剣」について解説したものである。『法釵図聞書』（54合-129号）では「法剱図」の周りに密教教理を用いた注釈が記されている（図2参照）。『法釵図聞書』の図像は、大分デフォルメされているが、蛇や五大などの宗教的なシンボルをもつ『麗気記』の神体図であることは明らかである。だが興味深いことに、『宝釵図注』『法釵図聞書』には『麗気記』やその類書からの引用は全く認められない。主に密教典籍や弘法大師伝にもとづく解釈がなされるなど「法剣」をめぐって、本軌たる『麗気記』とは異なる神話が展開されていることが窺える。

図2、真福寺蔵『法鈷図聞書』（真福寺蔵善本叢刊、神道篇第2巻『麗気記』、法藏館、二〇一九より転載）

そこで小稿では、法鈷図を核として、高野山を中心とする新たな密教神話の構築について概観する。

二、『法鈷図聞書』

『法鈷図聞書』は、「法鈷図」に私案・私注を加えた折紙である。聞書といっても伝来に関する記載はなく、講者や筆録者、講述の時期などは未詳である。管見の限り、真福寺本のほかに類書を見出すことはできないが、天保九年（一八三八）成立の『弘法大師年譜』に『法鈷図聞書』が引用され、解説がなされていることから、法鈷をめぐる秘説が、ある程度の広まりをもって受け入れられていたことがわかる。

わずか一紙にすぎないが、法鈷の概要が簡潔に纏められていることから、『法鈷図聞書』の検討を通じて中世神道の文脈によらない「法鈷図」解釈の要点を探りたい。

次に『法鈷図聞書』の翻刻本文を示す（論述の都合上、一部追い込みで示した。裏書は必要に応じて論中で示す。句読点は私意。図は真福寺蔵善本叢刊から転載）。

（二）

本聞書は、「法鈷図」に私注を付したもので、題目と二つの私注を外すことでもともとの法鈷図を復元することができる。二つある私注のうち、前半の注（「私案云」）では法鈷図の由来と外題に「御作」とある意味について、後半の注（「私云」）では宝剣に刻まれた銘についての注釈と図案の意味について述べられる。

法鈷図聞書法宝通音

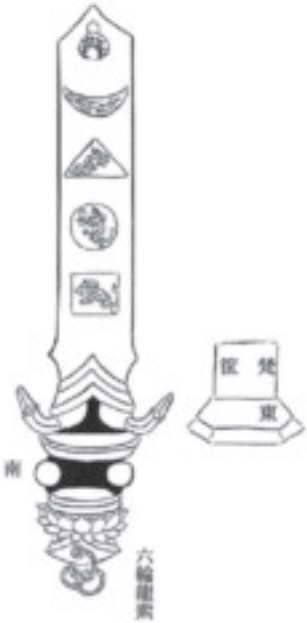
外題法鈷図御作

私案之二三世諸仏成道之時必感此法鈷一唱正覚一。高野大塔曳地之砌出現此故也。大師模写此法鈷一。仍云二御作一歟。

長五尺

金剛峯寺大自在堅固根本法鈷図

広七寸



（四）

以就秘密奥壇内為堅固結界宝也。諸仏与予知是無人。久成古仏処持塔鈷仏法於鎮護眼精也。仏法根本之首足。毎三世諸仏成道、此法鈷久従海中来。自七仏一嫡持此方一、及予二第十五代也〈御筆本在之〉。

私云、今就此図二有二一。一梵筐〈胎蔵界義。東ト注スル是也〉。二宝鈷〈金界義。南者今暫寶珠義。図之間為此也〉。於中二三股欄ト銘之。仏法根本之首足〈頂上𑖭字之縫目最下足之通名是物後不二

義其深之意也可秘之〉又云、毎三世諸仏成道此法剱従海中来〈ह字五輪塔形五龍持寶二風中間剱形〈更問〉自七仏ㄱ嫡持此法〈七仏通誡法葉治方之貫線経文〉及予身十五代也〈至十五日円満無碍之挙并者不空成就之尺尊尺迦牟尼〉欄右同銘六輪龍索〈五大五輪外加識大ㄱ者五名毘ルサナ法身。大即六龍也。空輪之二龍可知〉同欄双円形〈即論文於内心中観日月輪是也〉次上三重〈三部之結成〉上三股〈遍知院之三角形凡通心〉剱中欄〈火与欄同訓私之ㄱ〉

法剱図の名称は、正確には「金剛峯寺大自在堅固根本法剱図」という。金剛峯寺は真言宗の総本山である高野山のことで、寸法は「長五尺」「広七寸」（全長一メートル五〇センチ、全幅二一センチ）とされる。外題に付けられた注（「私案」）によれば、

外題法剱図御作　私案之ㄱ、三世諸仏成道之時必感此剱ㄱ唱正覚ㄱ。高野大塔曳地之砌出現此故也。大師模写此法剱ㄱ仍云ニ御作ㄱ歟

と、過去・現在・未来の三世において仏が成道する時には、必ずこの法剱を感得して悟りを得るという。また高野山の根本大塔を建立するために整地した際にも法剱が出現し、それを弘法大師が模写したのがこの図であるから「御作」というのかと推測している。

また後半の注（「私云ㄱ」）によれば、法剱図には「梵筐」と「宝剱」があり、宝剱の三股の束には

仏法根本之首足。毎三世諸仏成道、此法剱久従海中来。自七仏嫡持此方、及予第十五代也。

と銘[4]が刻まれているという。銘によれば、法剱は仏法の本体であり、三世（過去・現在・未来）の諸仏が成仏するごとに海中から出現するもので、過去七仏から嫡々と受け継がれ、予（弘法大師）で十五代目だという。

注目すべきは、天皇の王権の象徴たる三種神宝としての「宝剣」ではなく、仏の悟りの根本としての「法剱」

（五）

とされていることである。[5] 法釵は、金剛峯寺（高野山）の大塔との関係を強く意識し、過去七仏から空海に至るまで受け継がれてきた悟りそのものであり、それを描いた法釵図は弘法大師の作であった。このように『法釵図聞書』においては、『麗気記』と同じ図像を取り上げながら、全く異なる文脈での法釵解釈が展開されるのである。

三、密教神話の中の法釵

法釵図は、高野山金剛峯寺と空海と密接な関係があった。その論拠は弘法大師諸伝にあると考えられる。

康保五年（九六八）の成立とされる『金剛峯寺建立修行縁起』（以下『修行縁起』）には、夙に法釵出土の記事が認められる。そこでは、

重給二官符一。為レ建二立伽藍一、截二払樹木一之間、樹夾二彼於レ唐所レ投三古一儼然而有。弥増二歓喜一、則知、如二地主山王告一密教相応地也。墜二夷地一之処、地下堀二出一宝劔一。依レ勅進覧。依レ崇占レ崇占部卜推、当下今入二銅筒一返安中置之上。今案レ之、外護大明神奉レ惜耳、云云。（弘法大師伝全集一、五三頁下）

（六）

と、密教相応の地として寺を建立するため地面を曳きならしていると、地中から「一宝劔」が掘り出されたこと、その後天皇が叡覧したが祟りがあったため、占いの判断に従い、銅筒にいれて元の場所に安置されたことが語られる。占部は、祟りは高野山外護の大明神（高野明神または丹生明神）によるものと推測している。法釵出土の記述は、密教相応の地を定めた飛行三鈷の説話と、高野明神・丹生明神の護法善神説話に続けて配置されており、高野山の開山、金剛峯寺の建立と密接にリンクしていることがわかる。

『修行縁起』の段階では法釵出現の地を高野大塔とまで限定していないが、『弘法大師行状図画』（地蔵院本。南北朝期写）の「三鈷宝剣事」に、

又大塔を立ンがために地ヲひかれける時、ながさ五

尺、ひろさ一寸八分の宝剣、地中よりほりいだされき。前仏の遊所伽藍の旧基と云事分明也。（弘法大師伝全集九、九〇頁上下）

と、『修行縁起』の記述に「大塔」が結び付けられていることがわかる。

また『高野物語』第五（応永年間）では、

又大塔ヲ立テ給ハントテ地ヲ引キ平ゲラレシカバ、長サ五尺、広サ一寸八分ノ寶釵地ノ中ヨリ堀出ダセリ。前仏ノ遊處伽藍ノ旧基ト云事イチジルシ。（弘法大師伝全集九、二〇八頁下～二〇九頁上）

と、ほぼ同文を見ることができる。さらに『三国伝記』（十五世紀前成立）所引の弘法大師伝では、南天鉄塔を模して一基の塔婆を建立するため地面を整えた際に「長五尺、広一寸八分ノ宝釵」を掘り出したとされる。

弘法大師伝以外では、栄然（一一七二～一二〇七）撰『師口』巻一で虚空蔵求聞持法に関する「口伝」として、

口伝云、此宝剣ハ高野大塔ノ地曳トテ曳出タル剣也。長七尺剣也。以此為三形秘事也、云云（大正七八、八四九頁上）

と、「宝剣」が高野大塔建立時に出土したとあるのが早い例として挙げられる。なお長さは五尺ではなく七尺と異なっている。

『渓嵐拾葉集』（十四世紀前）の「高野大塔建立事」でも、地底の石櫃の中にあった鉄箱から「五尺ノ釵」が出土したことが述べられている。

一、高野大塔建立事　師物語云、中比高野山ノ大塔修造ノ事有キ。其時此塔婆ノ地ヲ引ケルニ地底ニ石唐櫃ノ中ニ又鉄箱有リ。其中五尺ノ釵有リ。其ニ五蛇ヲ纏シメタリ。以此事ヲ一公家ニ経奏聞一。其時以勅使ヲ一此釵被召ケリ一。其夜帝王ニ有御感夢。密迹金剛力士等南殿庭上ニ充満セリ。其ノ勅問アル処、彼密迹等申サク、我等ハ是高野ノ大塔ヲ守護也。有大師誓約一故我諸冥衆天等致擁護者也。若散在流布セハ佛法凌遲ナルヘシ。

（七）

仍為訴此事ヲ一参入スル由ヲ申ス。其時夢覚テ重テ被之立勅使ヲ一被レ止二此事一畢。（大正七六、七九二頁上）

とある師の物語によれば、そう遠くない昔に高野山の大塔を修造することがあった。その時にこの塔婆の地を整地すると地底に埋まっていた石の唐櫃の中から鉄の箱が発見され、鉄筐からは五尺の蛇が纏わされた五尺の剣が出てきた。それを天皇にお伝えしたところ、この剱をお取り寄せになった。するとその夜の天皇の夢に、密迹金剛力士達が南殿の庭上いっぱいに現れた。天皇がその理由を尋ねると、密迹たちが申し上げたことには、我らは高野山の大塔を守護するものである。弘法大師との誓約によって擁護するのである。もし（法剱が）散在すれば仏教は次第に衰えるだろう。このことを訴えるために参った旨を申し上げた。その時天皇は夢から覚め、再び勅使を立てて、剱を取り寄せるのを止めさせたという。

「高野大塔建立事」は久寿二年（一一五五）記と推測されることから、平安末期から鎌倉初期頃には同様の言説が広まっていたものと考えられる。本説話が『修行縁起』の話形、すなわち空海が法剱を感得した後に天皇が法剱を召したところ、高野外護の神の祟りがあったため返却したこと、を引き継いでいることは明らかである。だが空海が感得したのではなく、後世の高野大塔修造の際に再発見されたという体裁で描かれていることは興味深い。過去七仏以来受け継がれ、高野大塔の建立の際に発見された法剱は、さらに後世の修造において再び見出だされることで、『修行縁起』における法剱説話が真実であり、現在にまで繋がっている事象であることを示す。法剱図は、図という形でこれらの伝説を保証する役割を担っていたと考えられるのである。

（八）

四、聖地化される高野山

法剱を巡る言説においては、過去七仏以来受け継がれる法剱の出土を根拠として、高野山を前仏が遊戯した伽藍旧基とすることが述べられていた。このように高野山をより仏教の根源に近しい聖地へ近づけようとする志向は、既に『金剛峯寺修行縁起』から認められる。『修行縁

起』には次のようにある。

以二元慶七年一真然僧正奏二陽成院一云、金剛峯寺者非二凡徒経廻境界一。諸仏古跡・禅聖旧基也。（中略）真観僧正山図記云、（中略）周迴連峯表二報仏華台一正平幽原類二化仏浄土一。悪人趣レ斯如レ入二愚谷一毒獣改レ情似二金山鳥一。纔指レ影者可レ悦二往因一。黙而止者可レ恨二前業一云云　東山信禅師云、日域仏土者定是南山也。若所レ思者必可レ躋二彼地一。近者大師慇心志深彼終入定。遠者古仏聖跡。（弘法大師伝全集第一、五五頁下～五六頁上）

真然僧正が陽成院に奏状した言葉として、金剛峯寺が「諸仏ノ古跡・禅聖ノ旧基」であること、また貞観僧正の言葉として高野山の峰々や幽原がそれぞれ「報仏華台」「化仏浄土」といった仏国土であること、さらに東山信禅師の言葉として、日本の「仏土」は高野山（「南山」）にほかならないことが述べられる。現実に存在する高野山を仏教の聖地（仏国土）とする志向がかなり早い時期から存在していたことがわかる。

ただし『修行縁起』では、法釵出土の記事と、前仏の伽藍旧記であるという記事は別々の箇所にあり、ひとつの文脈では述べられていない。両記事がひとつの文脈の中で組み合わされた早い例としては『弘法大師御伝』（十二世紀頃成立）が挙げられる。ここでは『金剛峯寺修行縁起』の記述を下敷きにしながら、法釵（宝劔）出土の記事と、諸仏旧基の記事を組み合わせている。

高野山地給二官符一之後、為レ結二構仁祠一截二払樹木之時、於二唐土一所レ投三鈷懸二樹間一。弥増二歓喜一則知レ為二機縁相応之勝境一、又感二地主山王所レ告之不レ空。誠是至二于三会之暁一弥不レ可レ滅二密蔵一之地一耳。墜二夷地形一土中堀二出一宝劔一。長五尺広一寸八分。又覚二前仏遊処伽藍旧基一也。依レ勅備二叡覧一。然間不慮成レ祟。卜筮所レ奏当二此劔一。仍入二銅筒一返安二置之一。是乃外護大明神惜レ之而已。（弘法大師伝全集一、二二四頁）

（九）

ここでいう「前仏」は釈迦仏のことを指すと考えられる。[6]

また『弘法大師行状図画』でも法釵出土につづけて「前仏の遊所伽藍の旧基と云事分明也」とあり、『高野物語』には第五「前仏ノ遊處伽藍ノ旧基ト云事イチジルシ」と見え、法釵の出現をもって高野大塔が前仏の遺跡であることの証明としている。さらに政祝『弘法大師伝抄』「高野古仏浄土事」(応永年中)では、法釵との結びつきが明確に語られ、地下から法釵が掘り出されたこと、前仏の遊所伽藍旧記であるとしたうえで、弘法大師が上古四万劫にわたって高野山に住することや、大の三災にも破壊されないことが述べられる。[7]

『南山秘記』(十三世紀)では高野山の聖地と釈迦仏との関係が教理的に説明される。

又釈尊云、大日本国者大日ノ本国。胎蔵界為二日本国一。所以ニ大日経ハ者高野山ノ事ヲ説ト云フ秘記。月氏国ハ者釈尊霊鷲也。金剛界会為二鷲峯山一。是レ深秘也。又云ク、高野山八葉ノ峯者三界ノ衆生ニ灑給。殊於二彼山所住行者一其益何計哉ト有二被レ仰事一。去ルハ我昔釈迦菩薩ト名ケシ時、行所ノ壇上ニ有二十六丈之重閣講堂一。大塔ノ跡是也。持仏堂ノ跡ハ往昔ノ宝蔵、金堂ハ日々談議ノ砌、諸仏説法ノ所。一度参詣ノ者ハ悉滅二無量罪一。不レ可レ有レ生レ疑。故ニ高野山ハ法身常住ノ所、瑜伽瑜祇ノ山ナリ。金剛峯桜閣ハ金剛峯寺也。此所ハ霊鷲山報応二身ノ所、法花経ノ山ナルカ故也。(弘法大師伝全集第三、二二頁上下)

ここでは釈尊の説として、大日本国を「大日ノ本国」とし、金胎両部のうちの胎蔵界を日本国とし、『大日経』を高野山のことを説く秘記とする。さらにインド(月氏国)を金剛界に位置付けることでインドと日本を同等にし、師大日の本国たる日本、ひいてはその中心地である高野山の価値を大幅に高めている。また釈迦仏がまだ菩薩だった時に修行を行った場所を高野大塔の跡とするなど、釈迦仏の聖地を日本に比定する操作が行われていることがわかる。

また法釵と過去七仏との関係については『渓嵐拾葉集』

「七仏相承宝剣秘法」の末尾で「宝剣図」の存在が語られるとともに、

一、七仏相承宝剣秘法事〈東流云云〉示云、不動剣印是也。（中略）又名二降魔印一。是尺尊成道時挙一指降魔云此印也。サレハ東寺ニハ尺尊両度成道云也。（中略）宝剣図有別。可更尋也。口伝云云　又云、高野大塔納之法此事也。甚深〳〵（大正七六・七九二頁中）

と、過去七仏から相承された秘法が「不動剣印」「降魔印」であるとされた後に「高野大塔納之法」なる甚深の秘法とされるなど、高野大塔の基に埋められていた宝剣と過去七仏との関係に注目していることがわかる。

法釵図の銘によれば、法釵の相承は「予」（＝弘法大師）に至るまで十五代とされるが、過去七仏だけでは数が足りない。これについて、時代はくだるが『弘法大師年譜』（十九世紀）では銘文を引用したあとで、

七仏者常七仏及大日・金薩・龍猛・龍智・金剛智・不空・恵果也。二七十四ニ加二大師一故十五代也。此一一銘詞大師令レ記給云云。此伝與二上諸説一頗異轍。更思焉〉（弘法大師伝全集五、一四五頁上）

と、十五代とは、過去七仏と真言七祖（大日如来・金剛薩埵・龍猛・龍智・金剛智・不空・恵果）に、弘法大師を合わせた数との解釈が示されている。

このほか『弘法大師年譜』では、「古記云」として、法釵は「北院」（仁和寺）の旧蔵であったこと、法釵には「梵筐」があり、『理趣経』が収められていたこと、また元瑜僧正の言として弘法大師が土佐で虚空蔵求聞持法を修めた時に、海中から法釵が出現し、その後高野大塔の下に奉納させたことなどが述べられる。

〇古記云、此日記御筆有二北院御旧蔵一。法釵本有梵筐。般若理趣経入(8)云云。元瑜僧正曰、宝釵口伝余流無レ之。大師於二土州一修二聞持法一給時、自二大海一出現。御感得之後高野鎮壇大塔下令二奉納一給云。

（一一）

（弘法大師伝全集五、一四五頁上）

このように法釵をめぐっては、仏教の聖地たる高野山が形づくられていく中で様々な伝説が付与されていった。法釵図も高野山をめぐる伝説形成のヴァリエーションのひとつとして機能していたと考えられるのである。

五、おわりに

日本中世において、天皇の権威の象徴である三種の神器（剣・内侍所・神璽）は、本地垂迹説を背景とした密教的な解釈のもとに図像化された。いわゆる「三種神宝図」である。真福寺に蔵される『法釵図聞書』は、三種神宝図のうち主に「剣」について解説したものだが三種神宝図が依拠する『麗気記』やその類書からの引用は全く認められない。主に密教典籍や弘法大師伝にもとづく解釈がなされるなど、「法剣」をめぐって、『麗気記』とは異なる神話が形成されていた。

『法釵図聞書』によれば、仏が成道する際には、必ず法剣を感得して悟りを得るという。また高野山の根本大塔を建立する際にも法剣が出現し、それを弘法大師が模写したのが「法剣」とされる。これは、弘法大師伝における根本大塔からの法釵出土というモチーフを、神体図のひとつ「法剣」と結び付けた、新たな密教神話の構築と考えられる。『法釵図聞書』からは、「法剣」が、単なる神道図像に留まらず、密教の神話世界の中にまで大きな広がりを有していたことを窺い知ることができるのである。

（一二）

【注】

（1）三種神宝図の先行研究には、拙著『中世学僧と神道――了誉聖冏の学問と思想』（勉誠出版、二〇一二）、ルチア・ドルチェ「大英博物館の三種の神器図――神仏習合美術と十九世紀イギリスにおける日本的シンクレティズム理解――」（ルチア・ドルチェ・三橋正編『「神仏習合」再考』、勉誠出版、二〇一三）、伊藤聡「本尊図」（阿部泰郎編『仁和寺資料【神道篇】神道灌頂印信』（『名古屋大学比較人文学研究年報』二、名古屋大学文学部比較人文学研究室、二〇〇〇）などがある。

（2）『麗気記』「現図麗気記」（神道大系『真言神道（上）』、

八一頁）。

（3）小稿は、伊藤聡編『麗気記』（真福寺蔵善本叢刊神道篇第二、法藏館、二〇一九）における拙稿「解題『宝鈔図注』『法鈔図聞書』」を増補・改訂したうえで論文化したものである。そのため旧稿と一部重複する箇所がある。小稿では『法鈔図聞書』を主に取り上げ、『宝鈔図注』については別稿で論じる。

（4）『弘法大師年譜』によれば「名霊集、遊方記所レ出銘文未レ知二典拠一。恐従二此等図銘一私作二為之一附会者乎」（弘法大師伝全集五、一四五頁上）と、後世に創られた銘文があったとされ、実際に『野山名霊集』巻一「銘文云、釈迦如来転法地迦葉仏成道處中」（宝暦五年刊本）、『大師遊方記』巻三「銘曰、仏鎮之持法威是釈迦転法輪地標也」（善通寺本）などと見える。

（5）『法鈔図聞書』は一例「宝剣」とある以外は「法鈔」と表記される。『法鈔図聞書』の題下にある「法宝通音」との注から、法・宝の両義を音で通じさせていることがわかるが、おおむね「法」と書き分けていることは、密教色が色濃い本書の性格にも通じよう。

（6）『高野山巡礼記』では、五尺宝剣とともに理趣経が出土したこと、さらには宝剣が釈迦菩薩の本尊であること、経も釈迦菩薩所持の経であることが語られる。「所堀出五尺宝剣并金剛経軸事経〈般若理趣経也〉。不朽経軸於文字紙表示已失々々。件剣軸所堀出不知多。（中略）宝剣釈迦菩薩之本尊。経同菩薩持経也」（『続群書類従』第二八輯上、二九九頁上）参照。

（7）政祝『弘法大師伝抄』「御伝云、又地下堀二一宝剣長五尺広一寸八分一出。則知、前仏遊処伽藍旧基也云云。大師釈云、此峯者古仏旧基。召二集両部諸尊一所二安置一也。大師高野住給上古四万劫云云。彼山大三災不レ壊云云」（弘法大師伝全集第五、二六〇頁）参照。

（8）同様の記述が『高野山巡礼記』に見られる。注6参照。

＊本研究はＪＳＰＳ科研費２１Ｋ０００９３の助成を受けたものです。

（一三）